

C-62 岩手県の野良着における京文化の影響について
県立盛岡短大 平山 貞

目的 農民の生活の中から生まれた野良着は、地方によって特徴があり、合理的、実用的、且つ美的に工夫されたものが多い。本県の栗石と玉山地方の場合も、独特のその例と考えられる。一般に野良着は、紺緋や紺木綿で作られ、ゆずかに前垂れの紐や、たすきに色彩をあしらったものが多いが、両村のものは付属品まで色彩豊富で、上方の風俗を思わせるものがある。そこで本報は、これら京文化の影響ではないかと思われる点について、考察を行なったので報告する。

方法 史的文献調査および、古老よりの聞きとりによる方法と、実物による京都大原せ風俗との類似点の比較法による。

結果 郷土史的文献による点について、栗石は、江戸時代京の文化を岩手にもたらす、歴史的に重要な関門であった。また玉山は金山があり、砂金とりを目的とした山師や、落武者が土着し、両村とも上方との交流があったところである。実物による類似点については、(1)夏の肌着である汗はじきにみる亀甲織について、正倉院の「菴室草木鶴夾縹屏風」の文紗（川島織物研究所報告）と同じ組織がみられる。(2)三巾前垂れや手甲の装飾に類似点がみられる。(3)玉山の野良着、スッパの型染めである、玉山のとびもようが、大原せの手拭いに染められた桜や菊に似ている。(4)冬季のスッパの着装が、三枚襲ねにし、あごやかな反裨腰襦の縁取りが三段になるようにしているが、襲ねの色目を思わせる美しさである。これらの結果より、岩手県の野良着に、上方文化の交流の結果をみることができるとではないかと推測した。